

検証不在の『ちびくろサンボ』絶版問題

なぜ学会は論争を忌避するのか

守 一雄（信州大学助教授）

はじめに——本論文が学会誌に掲載されなかった経緯

本論文（後載『ちびくろサンボ』と『チビクロさんぽ』）は、1993年3月にほぼこのままの形で『教育心理学研究』に投稿された。『教育心理学研究』誌は、日本教育心理学会の機関誌として、学校教育や子どもの発達などに関する諸現象について、心理学的な研究論文の発表の場となっている。日本教育心理学会の会員である筆者は、実証的なデータがないままに「差別的だ」「差別的でない」と論じられてきた「ちびくろサンボ」問題を実証的に論じるには、この『教育心理学研究』誌こそが最適であると考えたからである。

しかし、編集委員会（委員長・聖心女子大学教授高橋恵子）は、「『ちびくろサンボ』は多くの子どもを楽しませたお話だが、問題点が指摘され、消えてしまった。これの改作を子どもに与える必要はない。オリジナルで子どもの喜ぶお話しが沢山あるし、『ちびくろサンボ』で育った世代がどんどん新しいお話しを作るだろう。（審査者の一人のコメント）」というような根拠のない一方的な決めつけに基づいて、本論文を「不採択」とした。

筆者は、審査委員3名のコメントすべてについて、反論をし、再審査を申し立てたが、編集委員会は筆者からの個々の反論には回答せず、「不採択は不採択である」という結論だけを通知してきた。その後、こうした審査の不当性について再三にわたって異議を申し立てたが、受け付けられなかった。

本論文が学会誌論文として採択されるべきであるかの最終判断は編集委員会がなすものであることは認める。しかし、そうした判断がなされる前には、編集委員会と投稿者との間で十分な論議が尽くされるべきである。こうした論議をとおしてこそ学問の進展が期待されるのであり、学会は研究発表の場であるとともに論争の場であるはずである。ところが、編集委員会のこうした対応は論争を避けているとしか考えられない。

審査委員3名のコメントがいかに的外れなものであるかもここで紹介したいところであるが、誌面の都合から割愛した。コメントの全文とそれに対する反論は、守(1995)「『チビクロさんぽ』はどう評価されたか：『教育心理学研究』『読書科学』編集委員会の不当な審査結果に抗議する」（信州大学教育学部紀要第84号）に掲載する予定である。

本論文の掲載を忌避した学会誌は『教育心理学研究』だけではない。本論文は『教育心理学研究』と同様に実証的な科学論文を掲載している『読書科学』誌にも投稿された。『読書科学』誌は、日本読書学会の機関誌で、読書教育や読書研究などの研究発表にあてられている。筆者は日本読書学会の会員であり、本研究の概要は、日本読書学会第36回研究大会（筑波大学学校教育部、1992年）において口頭発表もされているのであるから、本論文を掲載してもいいはずである。

しかし、『読書科学』編集委員会（委員長・筑波大学助教授鳴島甫）も、いろいろと論文の内容以外の部分での注文をつけた上、最終的には、編集委員長名で「登載する以上はこの論争〔今日の差別の問題を科学的根拠のあるなしで論ずること：引用者〕を誌上でも引き受ける覚悟をしなければなりません。はたして今後どれだけ『読書の科学』として有効な論争が期待できるか、混乱をひきおこすだけではないのか、等を考えた時、採択に踏み切ることはできませんでした。」という回答をしてきた。つまり、「論争を誌上でも引き受ける覚悟がない」というなげない理由で「不採択」にしたのである。

こうした経緯により、2年近い時間と数回にわたる異議申し立ての労力とが浪費されてしまった。その間、「ちびくろサンボ」問題は、風化されてしまったかのようにほとんど話題にもされなくなった。今回こうした機会をえて公刊することができたが、『教育心理学研究』『読書科学』の両編集委員会の編集姿勢にここで改めて強く抗議する次第である。

『ちびくろサンボ』と『チビクロさんぽ』 —差別表現をもつ絵本とその改話とのおもしろさの比較—⁽¹⁾

【概要】

ヘレン・バナマン (Helen Bannerman) 原作の『ちびくろサンボ』の主人公を黒人の子どもから黒犬に替え、名前も「サンボ」から「チビクロ」に替えて、差別表現を含まないよう改話を作った。54人の就学前児(4-5歳)を2群に分け、原話または改話と別の話『ぐりとぐら』を読み聞かせた。2つの話を読んだ後、どちらの話の方がおもしろいかを選択させた。その結果、改話されたものも、原作と同様に子どもたちにおもしろがられていることがわかった。

ヘレン・バナマン (Helen Bannerman) 原作の『ちびくろサンボ』⁽²⁾ (原題 The Story of Little Black Sambo) は黒人に対する差別本であるという理由で日本語版のすべてが絶版となっている(この経緯については、子どもの本の明日を考える会(1990)、径書房(1990)、日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会関東地区小委員会(1990)、杉尾・棚橋(1990:1992)などが詳しい)。『ちびくろサンボ』の差別的である点として、東郷(1990)らは以下の3点を指摘している。

- (1)西欧社会において歴史的に黒人への蔑称である「サンボ」が使われている。
- (2)イラストにステレオタイプ化された黒人像が用いられている。
- (3)ストーリーが黒人を野蛮人として描いている。

これらのうち、特に問題とされているのは、(1)の「サンボ」という蔑称である。(2)(3)については、芸術的・文学的領域に属し、必ずしも差別的であるとは言い切れない。一方で、この物語が日本の子どもたちに大変人気があり親しまれてきたことから、絶版を惜しむ声も多い。

いわゆる「ちびくろサンボ」問題に関しては、いろいろな議論がなされてきたが、実験的に客観的なデータを提供しているものは少ない。そうした中で、大久保(1976)は、原作を含む6種類の「ちびくろサンボ」の絵本を、大人と子ども(2~12歳)に読ませて(あるいは読み聞かせて)、(日)どの本が一番よいか、(月)一番おもしろいことばはどれか、などを調べている。その結果、大人に比べ子どもは絵や文章に好みの差がほとんどなく、おもしろいと思うところはほぼ一定している(たとえば、「トラがバターになるところ」など)ことがわかった。大久保は、こうした実験結果を基に考察を進め、この絵本が差別意識とは結びつかないと論じているが、そうした結論をこれだけの実験結果から導くことには無理がある。

『ちびくろサンボ』の差別性が指摘され、つぎつぎと絶版にされて行った中で、表現を改めることによって差別的な要素を取り除こうと試みた例に『ブラック・サンボくん』(山本,1989a)がある。しかし、「サンボ」という言葉が残されたままであったために、その意図が活かせなかった。イラストや表現を改めたにもかかわらず、批判が最も集中していた「サンボ」という主人公の名前そのものを変更しなかった理由は、原作に忠実でありたいというものであったが(山本,1989b)、他にも2つの理由が考えられる。

その第一は、主人公名と物語との一体化である。絵本を含む多くの文学作品において、主人公名が物語そのものを代表している。そこで、主人公名を変えることが、物語そのものをまったく別のものに変えてしまうように感じられる。『ドラえもん』の主人公の名前が「タマのすけ」であったとしても、同じストーリーを展開させることは可能であるはずだが、そうした発想は生まれにくい。

第二の理由は、ある意味では第一の理由と同じことであるが、主人公名を変えてしまうと、原作と改話との間の連続性・関連性が失われてしまうということである。かつて『鉄腕アトム』がアメリカのテレビアニメに吹替えられた際、『アストロボーイ』という名前に変えられたという。絵もストーリーも同一のこの作品の関連性を、このタイトルだけから見つけ出すことはまず不可能である。

そうしてみると、『ちびくろサンボ』の改話を行なう際には、「サンボ」という言葉を使わないという顕在化している条件と、原作との連続性・関連性を保たなければならないという暗黙の条件とが、二律背反となっていたと考えられる。多くの議論がなされる中で、主人公名そのものを変えればよいとい

うアイデアが生じなかったのもそのためであろう。

そこで、「サンボ」という蔑称を使わずに、主人公を「チビクロ」という名の犬に置き換えて、物語を書き換えてみた。その際、主人公名の「サンボ」を「チビクロ」に置き換える一方、タイトルに「サンボ」と語感の良く似た「さんぼ（散歩）」をあてて、原作との連続性を確保することにした。（そこで、改話のタイトルは『チビクロさんぼ』となった。改話の全文は【資料】を参照されたい。なお、原作の主人公の名前を、翻訳にあたって変更している例に、『クマのプーさん』【原題は Winnie the Pooh】がある。）

その他、改話にあたっての留意点は、次の通りである。犬の名前とはいえ「ちび」や「くろ」も蔑称ではないかという指摘がされるかも知れない（たとえば、脇(1990)は「ちびくろというのはあまり感じのいい言葉ではない」という意見を述べている。）しかし、『ちびまる子ちゃん』や『のらくろ』などがそうした批判を受けた様子はない。少なくとも、「サンボ」よりも許容度はずっと大きいであろう。

原作では主人公の両親の名は、「マンボ(Mumbo:母親)」と「ジャンボ(Jumbo:父親)」となっている。英語では、mumbo jumbo という成語で「わけの解らない呪文、ちんぷんかんぷん」という意味があり、これらの命名にも侮蔑的表意が含まれているという。一方、「マンボ(Mumbo)」の命名は、「ママ(mum = mom)」とのかけ言葉であることは明らかであり「マンボ(Mumbo)」と「ジャンボ(Jumbo)」は「サンボ(Sambo)」と韻を踏んでいる。そこで、ここでは、「ママクロ」「バパクロ」という名にした。犬が服を着たり、作ったり、人間同様の活動をするのは物語の世界では普通のことである。原作でも、虎がしゃべる。ちなみに、「さんぼ（散歩）」という言葉は原話にもある。

原話としては光吉(1953)の訳（岩波書店版）を用いた。イラストも岩波書店版に使われているフランク・ドビアス(Frank Dobias)のものを基に一部改変した。

目的

こうした改話がなされることにより、『ちびくろサンボ』の差別的要素が取り除かれ、また、原作との連続性がある程度保たれたとしても、原作の持っていたおもしろさが損なわれたのでは、意味がない。そこで、改話されたものが、原作と同様のおもしろさを保持しているかどうかについて実験的に検証する必要が生じる。この検証は、この絵本の読者である子どもを用いて調べるべきである。そこで、本研究は、「サンボ」という差別用語を用いずに改話されたものが、原話同様のおもしろさを子どもたちに与えることができるかどうかを、心理学的な実験により実証的に検討することを直接的な目的とした。

差別的な要素を持たない『チビクロさんぼ』が『ちびくろサンボ』同様のおもしろさを子どもたちに与えることができるとすると、子どもたちは『ちびくろサンボ』を、指摘されているような差別的な要素に基づいておもしろがっているわけではないことの証明ともなる。それゆえ、本研究の目的は、差別的な要素を取り除いた改話との比較を通して、『ちびくろサンボ』のおもしろさが差別に基づくものではないことを実証的なデータによって示すことでもある。

方法⁽³⁾

1. 被験者 長野市内の幼稚園4歳児2クラス54名（各クラス男子13名、女子14名ずつ）。

2. 実験条件 各クラスを以下の2条件にランダムに割り振った。

「サンボ」群：『ちびくろサンボ』と『ぐりとぐら』（中川・大村、1963）を比較する

「さんぼ」群：『チビクロさんぼ』と『ぐりとぐら』を比較する

3. 実験材料 『ちびくろサンボ』『チビクロさんぼ』『ぐりとぐら』をそれぞれ、紙芝居にしたものを用意した。それぞれは、絵本のイラストをB4版大（縦271mm 横372mm）の用紙に忠実に拡大模写したものである。まず、初めに『ちびくろサンボ』の紙芝居を作り、そのカラーコピーの一部（顔、手足

など)を改変して『チビクロさんぼ』の紙芝居を作った。『ちびくろサンボ』については、原話の見開き2ページを1枚の紙芝居にした。その結果、表紙を含めて18枚からなる紙芝居となった。(図-1 参照)『ぐりとぐら』についても、見開き2ページを1枚の紙芝居画面にあてることを原則としたが、原話の絵本が横長のものであったため、一部トリミングをしたり、ページ割りを変更したりした。その結果、表紙を含めて15枚からなる紙芝居となった。

=====
図-1 挿入箇所
=====

図-1 『ちびくろサンボ』(上)と『チビクロさんぼ』(下)の紙芝居の一場面(18枚の内の8枚目)

4. 手続き 実験条件群ごとに、2種類の紙芝居を見せた。紙芝居を見せる順序は、『ぐりとぐら』を先に、『ちびくろサンボ』『チビクロさんぼ』を後にした。紙芝居の読み手は、各クラスの担任教諭が担当した。『ぐりとぐら』には約6分間、『ちびくろサンボ』『チビクロさんぼ』には約10分間をかけて、自然なスピードで紙芝居を見せた。

2つの紙芝居が終わった直後に、被験者一人ずつに次の質問をし、口頭で回答させた。

(1)どちらがおもしろかったか

(2)おもしろかった紙芝居で、一番おもしろかった場面はどこか

紙芝居は、27名同時に見せたが、質問は、友達同士の回答に影響されることのないよう、場所を移して、3名の実験補助者により個別に行われた。

結果と考察

1. どちらの話が選択されたか

『ちびくろサンボ』または『チビクロさんぼ』を『ぐりとぐら』と比較した時に、子どもたちがどちらを好んだかを、表-1にまとめた。『チビクロさんぼ』の方を選択した子どもたちの数が少し多かったが、どちらか一方への大きな偏りは見られず、 χ^2 検定の結果、両者に統計的な差異はなかった($\chi^2 = 0.297$)。結果を男女別に分析してみても、同様であった。こうしたことから、『ちびくろサンボ』と『チビクロさんぼ』とは、ほぼ同程度のおもしろさであると子どもたちに判断されたと考えることができる⁽⁴⁾。

表-1 『ちびくろサンボ』または『チビクロさんぼ』と『ぐりとぐら』の比較結果

選択したお話	サンボ条件	さんぼ条件	合計
「サンボ」	13人		28人
「さんぼ」		15人	
「ぐりとぐら」	14人	12人	26人
	27人	27人	54人

2. 選択の理由(お話のおもしろかったところ)

子どもたちがおもしろかったと報告した場面は、表-2のとおりであった。両条件で目だった差はなく、また、大久保(1976)の結果とほぼ同様であった。つまり、主人公を犬に置き換えたとしても、子どもた

ちは、原作の持つおもしろさを原作とほぼ同じように感じていたということになる。

表-2 『ちびくろサンボ』または『チビクロさんぼ』でおもしろかったところ

おもしろかったところ	サンボ条件	さんぼ条件	合計
(1)虎のけんかの様子	4人	3人	7人
(2)虎がバターになってしまうところ	2人	3人	5人
(3)虎とサンボ・チビクロのやりとり	2人	1人	3人
(4)ホットケーキを食べるところ	4人	2人	6人
(5)全部	0人	3人	3人
(6)わからない	1人	3人	4人
	13人	15人	28人

3. 『ちびくろサンボ』の差別性の否定

こうした実験結果から、少なくとも子どもたちは、『ちびくろサンボ』のおもしろさを「黒人に対する差別心」や「『サンボ』という言葉そのもの」から得ているわけではないことがわかった。実は、実験をするまでもなく、この話のおもしろさは「虎がバターにかわること」など、ストーリーそのものにあり、差が出るはずがないと考えていた。そうした意味で、この話を「差別心からおもしろがる」という批判がなぜ生じてくるのかが筆者にも理解できなかった。しかし、今回の実験を計画中の時点で、ある年輩の方から、次のような手紙をいただき、あるいは、ある程度以上の年輩の人々の中には、人種差別に基づくおもしろさを『ちびくろサンボ』の中に見いだしている可能性があることがわかった。本実験結果は、子どもたちがこうした視点から『ちびくろサンボ』をおもしろがっているわけではないことをもハッキリと示したものであると言えるであろう。

「この物語、黒人を主人公にしているから差別だって、世の中では騒がしいんだけど、たしかに黒犬の散歩の話なら問題はないわけです。ところで、そう改作したら、おもしろさが変わるかどうかを調べる心理学的実験を計画されているそうですが、しかし、これはやってみるまでもなく、結果は明らかだと思います。絶対つまらなくなる。せっかくおめかしして出かけたサンボが、だんだん身ぐるみ剥がれてスポンポンにされちゃうおかしさは、人間それもかわいいくるんぼの子どもでなくちゃ決まらないわけで、犬だったら裸になってもおかしくもおもしろくもないですからね。」(50代後半の大学教官、男性)

こうした引用文のような意見の背景には、黒人に対する差別感が世代によって異なっていることがあるのかも知れない。上記に引用した大学教官の幼児期は、第二次世界大戦前であり、その当時の日本人の黒人観は、現在とは違っていただと考えられるからである。とすれば、現在60歳以上の年代の人々にとっては、『チビクロさんぼ』のおもしろさの感じ方は本研究での幼児たちとは違っている可能性がある。今後は、『ちびくろサンボ』と『チビクロさんぼ』のおもしろさの違いが年代によって違ってくるかどうかについても、検証していきたいと考えている。

引用文献

- Cohen, J.(1988) Statistical Power Analysis for the Behavioral Sciences(2nd ed.) Academic Press.
 原山成美(1992)「『ちびくろサンボ』と『ちびくろ・さんぼ』—絵本における差別表現の心理的意義についての実験的研究—」平成3年度信州大学教育学部 教育心理学科卒業研究(未発表)
 子どもの本の明日を考える会(1990)『「ちびくろ・さんぼ」はどこへいったの?』子どもの本の明日を考える会

径書房(1990)『「ちびくろサンボ」絶版を考える』 径書房
光吉夏弥(1953)『ちびくろ・さんぼ』(へれん・ばんなーまん原作)岩波書店(1978年改訂版・1988年絶版)

中川李枝子・大村百合子(1963)『ぐりとぐら』福音館書店
日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会関東地区小委員会(1990)『「ちびくろサンボ」問題を考える：シンポジウム記録』日本図書館協会

大久保みどり(1976)「ちびくろ・さんぼ」論—実験を中心に—『児童文学評論』No.12、137-152ページ
杉尾敏明・棚橋美代子(1990)『ちびくろサンボとピノキオ—差別と表現・教育の自由—』青木書店
杉尾敏明・棚橋美代子(1992)『焼かれた「ちびくろサンボ」—人種差別と表現・教育の自由—』青木書店

東郷茂彦(1990)「ちびくろさんぼ」を、なぜ子供に読ませたくないか。(径書房(1990)176-183ページ所載)

脇 明子(1990)「子どもの目は正しいか—喜びの質の問題」(子どもの本の明日を考える会(1990)所載)

山本まつよ(1989a)『ブラック・サンボくん』(ヘレン・バナマン原作)子ども文庫の会
山本まつよ(1989b)「サンボくん」(『季刊飛ぶ教室』第32巻、1989年11月、所載)

脚注(1)本研究の一部は、日本読書学会第36回研究大会(筑波大学学校教育部、1992年)において口頭発表されている。絶版で手に入らなくなった岩波書店版の『ちびくろ・さんぼ』を個人的に貸して下さった長野市立図書館の徳武さん、実験に協力して下さった長野市吉田マリア幼稚園の皆様には感謝いたします。

脚注(2)本研究で用いられた岩波書店版では『ちびくろ・さんぼ』と表記されているが、ここでは、『チビクロさんぼ』との差異をハッキリさせるため、こう表記することとする。

脚注(3)実験データの収集は、筆者の指導の下、卒業研究として原山成美(信州大学教育学部教育心理学科平成3年度卒業)が行った。また、改話のイラストも原山が描いた。(原山、1992)

脚注(4)Cohen(1988)の検定力分析法によれば、改話された『チビクロさんぼ』が原話の面白さを著しく損ねた($w=.50$)という対立仮説は95%以上の確率で棄却されている。

【資料】『チビクロさんぼ』全文

あるところに、かわいい くろい いぬが いました。
なまえを ちびくろと いいました。

おかあさんの なは ままくろ、おとうさんの なは ぱぱくろと いいました。

おかあさんの ままくろは、ちびくろに、あかい きれいな うわぎと、あおい
きれいな ずぼんを、つくってくれました。

おとうさんの ぱぱくろは、いちばへ でかけて、きれいな みどりいろの かさと、
そこが まっかで、うちがわも まっかな、かわいい むらさきいろの くつを、
かってきて くれました。

これだけ そろったら、ちびくろは、どんなに りっぱに みえることでしょう。

ちびくろは、あかい うわぎと あおい ずぼんに、むらさきいろの くつを はいて、みどりの かさを さして、じゃんぐるへさんぽに でかけました。すこし いくと、とらが できました。

「ちびくろ！ おまえを たべちゃうぞ！」と、とらは いいました。

そこで、ちびくろは いいました。

「どうぞ、とらさん、ぼくを たべないで！ ぼくの この きれいな あかい うわぎを あげるから」

すると、とらは いいました。

「よし、じゃあ、こんどは、たべないで おいてやろう。だけど、その きれいな あかい うわぎを くれなきゃ、だめだぞ」

とらは、かわいそうな ちびくろの きれいな あかい うわぎを もらって、

「これで、おれさまは じゃんぐるじゅうで いちばん りっぱなとら じゃわい」といいながら、むこうへ 行って しまいました。

また すこし いくと、また べつの とらが できました。

「ちびくろ！ おまえを たべちゃうぞ！」と、とらは いいました。

そこで、ちびくろは いいました。

「どうぞ、とらさん、ぼくを たべないで！ この きれいな あおい ずぼんを あげるから」

すると、とらは いいました。

「よし、じゃあ、こんどは、たべないで おいてやろう。だけど、その きれいな あおい ずぼんを くれなきゃ、だめだぞ」

とらは、かわいそうな ちびくろの あおい ずぼんを もらって、

「これで、おれさまは じゃんぐるじゅうで いちばん りっぱなとらじゃわい」といいながら、むこうへ 行って しまいました。

それから、ちびくろが、また すこしいくと、また べつの とらが できました。

「ちびくろ！ おまえを たべちゃうぞ！」と、とらは いいました。

「どうぞ、とらさん、ぼくを たべないで！ この そこが まっかで、うちがわも

まっかな、きれいな むらさきいろの くつをあげるから」

けれども、とらは いいました。

「いやいや、そんな ものを もらったって、しょうがない。おまえは にんげんのまねを して、二ほんあしで、あるいて いるが、おれさまは 四ほんあしだ。くつのかずが たりないよ」

そこで、ちびくろは いいました。

「みみに はけば、いいですよ」

「な、なるほどね」と、とらは いいました。「そいつは いい かんがえだ。それじゃ、こんどは、たべないで おいてやろう」

とらは、かわいそうな ちびくろの きれいな むらさきいろのくつを もらって、

「これで、おれさまは じゃんぐるじゅうで いちばん りっぱなとらじゃわい」といいながら、むこうへ 行って しまいました。

それから、ちびくろが、また すこし いくと、また べつ の とらが できました。

「ちびくろ！ おまえを たべちゃうぞ！」と、とらは いいました。

そこで、ちびくろは いいました。

「どうぞ、とらさん、ぼくを たべないで！ ぼくの この きれいな みどりいろのかさを あげるから」

けれども、とらは いいました。

「おまえは にんげんの まねを して、二ほんあしで、あるいているから、かさを させるが、おれは、あるくのに あしが 四ほんいる。いったい、どうやってかさを させば いいんだ？」

「しっぽに ゆわえつけて、させば いいですよ」と、ちびくろはいいました。

「な、なるほどね」と、とらは いいました。「それなら、かさを よこせ。こんどは、たべないで おいてやろう」

とらは、かわいそうな ちびくろの きれいな みどりいろの かさを もらって、

「これで、おれさまは じゃんぐるじゅうで いちばん りっぱなとらじゃわい」といいながら、むこうへ 行って しまいました。

ひどい とらたちに、うわぎも ずぼんも、くつも かさも、みんな とられてしまって、

ちびくろは、おいおい なきながら、あるいて いました。

すると、「ぐる・る・る」という、おそろしい こえが きこえて きました。

そして、こえは だんだん おおしく なって きました。

「たいへんだ！ たいへんだ！」と、ちびくろは いいました。「とらが みんなで ぼくを たべに やってくる！ どうしよう？」

そこで、ちびくろは おおいそぎで やしの木の かげに かくれて、いったい、 どういうことになるのかしらと おもいながら、そっと のぞいて みました。

すると、とらたちが みんなして、

「おれが、いちばん りっぱな とらだ。おれが、おれが」といって、けんかを しているのです。しまいには みんな、かんかんにおこりだして、うわぎも かさも ずぼんも くつも ほうりだして、つめで ひっかけあったり、おおきな しろい はで かみつきあったり、おおげんかに なって しまいました。

そして、とらたちは、ごろん ごろん、どたん ばたと、ちびくろの かくれている 木の すぐ そばまで やってきました。ちびくろは、おおいそぎで かさの うしろへ にげこみました。

とらたちは、ふうふう いいながら、となりの とらの しっぽに くいついて、ぐるぐる かけまわりました。

それで、木の まわりに、とらの わが できて しまいました。

そこで、ちびくろは かさの かげから かおを だして、どなりました。

「とらさん、とらさん、どうして こんな いい かさや きものを、すてちゃったの？ もう いらないの？」

けれども、とらたちは ただ、

”ぐる・る・る・る・る・る・るるるるるるるるるる”

と、いった だけでした。

そこで、ちびくろは いいました。

「もし いるんなら、そう いって おくれよ。でなきゃ、ぼくがもってっちゃうよ」

でも、とらたちは まだ、しっぽを くわえた ままでしたので、

”ぐる・る・る・る・る・るるるる”

としか、いえませんでした。

そこで、ちびくろは また、きれいな きものを きて、かさをさして、いってしまいました。

とらたちは、それを みて、かんかんに おこりました。それでもまだ、しっぽを はなそうと
しませんでした。

そして、はらだちまぎれに、あいての とらを たべて しまおうとして、ぐるぐる 木の
まわりを かけまわりました。

そのうち、あんまり はやく まわったので、あしが ぜんぜんみえなくなって しまいました。

それでも、まだ やめないで、ぐるぐる ぐるぐる まわって いるうちに、とうとう、
みんな だるだるに とけて しまいました。あとには、ばた（いんどでは”ぎー”といいます）
の おおきな いけが のこっただけでした。

ちょうど そのとき、おとうさんの ぱぱくろが、おおきな つぼを もって、しごとから
かえって きました。そして、とけたとらたちを みて、おおよろこびで いいました。

「こいつは、すてきな ばたじゃわい！ うちへ もってかえって、ままくろに おいしい
ごちそうを つくってもらおう」

そこで、ぱぱくろは おおきな つぼに いっぱい、とけた ばたを 入れて、うちへ もって
かえりました。

うちでは、ままくろが おおよろこびでした。

「さっそく、ほっとけきを こしらえて、みんなで たべましょう！」

そこで、ままくろは こなと たまごと みるくと、おさとうをまぜて、とても おいしそうな
ほっとけきを おさらに いっぱい、やまもりに つくりました。それから、それを とらの
ばたで やくと、ちょうど とらのような、きいろい こんがりしたいろに なりました。

それから、みんなで たべました。

おかあさんの ままくろは、その おいしい ほっとけきを 二十と 七つも たべました。

そして、おとうさんの ぱぱくろは 五十五も たべました。

けれども ちびくろは、なんと 百六十九も たべました。とても、おなかが すいて いたのでね。